

持統天皇御製歌と原撰『万葉集』

On The Uta By The Emperor Jitō And The Original Selection Of The MANYŌSHŪ

鈴木 武晴

Takeharu SUZUKI

一、読み込まれていない名歌

『万葉集』巻第一には、持統天皇の名歌が収められている。

天皇の御製歌

春過ぎて夏来る^{きた}らし白妙^{しろたへ}の衣^{ころも}干したり天^{あめ}の香具山^{かぐやま} (二八番歌)

この歌については、暦法意識に基づいて、春から夏への季節の推移の折り目を詠んださわやかな夏歌と捉えられている。この通説に問題はない。けれども、歌の表現をていねいに検討し深く読み込めば、持統天皇の創作意識や歌詠に込めた思いなどに新たな見方が生

まれる。また、持統天皇御製歌の万葉集原撰五十三首本における立ち位置の意義なども、新たに浮き彫りになる。如上の諸点について、以下、具述する。

二、「春過ぎて夏来るらし」

―額田王歌の季節推移表現を意識―

持統天皇歌の「春過ぎて夏来るらし」のように、春から夏への推移を詠んだ歌は、持統天皇歌以前にはない。けれども、冬から春への推移を詠んだ歌は存する。それは、持統天皇歌と同じ巻一に収録されている額田王の次の歌である。

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の万花の艶と秋山の千葉の彩とを競ひ憐れびしめたまふ時に、額田王が歌をもちて判

る歌

冬木成 春さり来れば 鳴かずありし 鳥も来鳴きぬ 咲
かずありし 花も咲けれど 山を茂み 入りても取らず
草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉を
ば 取りてぞ偲ふ 青きをは 置きてぞ嘆く そこし恨め
し 秋山我は (一六番歌)

この歌は題詞に伝えるように、宮廷の文雅の遊びの場面における額田王の活躍を告げる歌である(天皇は天智天皇。内大臣藤原朝臣は藤原鎌足)。その冒頭一句「冬木成春さり来れば」は「冬木の茂る春がやって来ると」の意味で、冬から春への季節の推移を詠んだ最初の表現で重要である。

持統天皇(当時は鸕野讃良皇女)も、この文雅の遊びの場にい

たであろう。そして、額田王がうたう歌に耳を傾けていたであろう。日本最初の季節推移の表現「冬木成春さり来れば」はしかとその脳裏に刻まれたであろう。持統天皇歌の「春過ぎて夏来るらし」の季節推移表現は、額田王の「冬木成春さり来れば」を

意識して生み出された表現と考えられるのである。

額田王も持統天皇も、天武天皇の妻であり、お互いに強く意識することは当然であり、文芸においても同様であったと思われる。宮廷においては、先に額田王が華々しく活躍しており、それを見ていた持統天皇の心には額田王に対抗する意識があったであろう。^(注1)

持統天皇歌の「春過ぎて夏来るらし」の表現は、額田王歌の「冬

木成春さり来れば」を意識した上での新表現であることが具体的にわかってくる。

持統天皇歌の初句を額田王が用いた「さる」という近づくことも遠ざかることも表す移動の動詞を用いて「春さりて」と表すと、「春がやってくる」意に受けとられてしまうであろう。そこで、持統天皇は、「さる」ではなく「過ぐ」という動詞を用いて、春が過ぎ去ることを明確にして「春過ぎて」と表現したものと考えられるのである。「春過ぎて」は持統天皇が額田王歌の「冬木成春さり来れば」を意識したことをしかと語り告げているのである。漢文において「時過然後学、則勤苦而難成」(『礼記』『学記』)の例などがあり、時が過ぎ去る意の「過ぐ」の知識の応用ということも考えられる。万葉集中にも、「時過ぐ」の例が見られる(巻十二・三〇九、二二五一番歌など)。また、持統天皇二八番歌の次の二九番歌の「近江の荒れたる都を過ぐる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌」には、持統天皇歌の時間的「過ぐ」に対して、空間的「過ぐ」が用いられていることも言い添えておきたい。

三、「白妙の衣干したり」に込められたねぎらいの御心

持統天皇歌の第三句四句の「白妙の衣干したり」の表現に考察を移そう。先述のように、「白妙の衣」は天の香具山をまつり奉仕する人々の白衣と見られる。その人々は宮廷に所属して祭祀に従事する人々であろう。中臣氏などの人びとであろう。

「白妙の衣干したり」の表現を深く考察するのに参考になる歌が

ある。それは、摂津の国の班田司の判官大伴宿禰三申が部下の史生大・部・龍麻呂の死を悼んだ歌（巻三・四四三（四四五番歌）で、任務に一生懸命に従事する龍麻呂を「大君の命恐み 押し照る難波の国に あらたまの 年経るまでに 白栲の 衣も干さず朝夕に ありつる君は」と詠じ、それに続けて「いかさまに 思ひいませか うつせみの 惜しきこの世を 露霜の 置きて去にけむ 時にあらずして」と心から思いやっている。

この例を参照すれば、持統天皇歌の「白妙の衣干したり」は、天の香具山をまつり奉仕する任務が一段落着いたことを表しているとともに、任務にあたった人々へのねぎらいの心がこめられていると言えよう。

四、天の香具山 ―響き合う天の香具山

持統天皇は、結句を「天の香具山」と堂々と歌い収めている。

「天の香具山」は万葉集巻第一に当面の持統天皇歌を含めて三例、三首の歌に詠まれている。順に掲げれば次のとおり（持統天皇歌も考察の便宜上、再掲する）。

1 天皇、香具山に登りて国見したまふ時の御製歌
大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち
ち 国見をすれば 国原は けぶり立ち立つ 海原は か
まめ立ち立つ うまし国ぞ 蜻蛉島 大和の国は（二番歌）

2 天皇の御製歌

春過ぎて夏来るらし白妙の衣干したり天の香具山（二八番歌）

3 藤原の宮の御井の歌

やすみしし 我ご大君 高照らす 日の御子 荒栲の 藤井
が原に 大御門 始めたまひて 埴安の 堤の上に あり立
たし 見したまへば 大和の 青香具山は 日の経の 大
御門に 春山と 茂みさび立てり 畝傍の この瑞山は 日
の緯の 大御門に 瑞山と 山さびいます 耳成の 青菅
山は 背面の 大御門に よろしなへ 神さび立てり 名
ぐはし 吉野の山は 影面の 大御門ゆ 雲居にぞ 遠く
ありける 高知るや 天の御蔭 天知るや 日の御蔭の 水
こそば とこしへにあらめ 御井のま清水（五二番歌）

短歌

藤原の大宮仕へ生れ付くやをとめがともは羨しきろかも（五三番歌）

右の歌は、作者未詳。

1は舒明天皇の歌、2は持統天皇の歌で、3は作者未詳であるが、持統天皇の時代の歌である。

この三つの歌の「天の香具山」が相互に響き合っていると見える。奇しくも、一番歌から五三番歌までは、橘守部の『万葉集墨繩』『万葉集檜婦手』や伊藤博『万葉集の構造と成立 上』（第二章第一節）・

同『萬葉集釋注 一』などに説くように、万葉集の原撰部であり、象徴的意味合いをもつて最初に置かれた雄略天皇御製歌（一番歌）の次の先掲舒明天皇御製歌（二番歌）がその実質のはじまりを担う。原撰部における二番歌と五二―三番歌の響き合いのほぼ中央に持統天皇御製の二八番歌が立ち、二番歌、五二―三番歌と響き合う構図となっていると言える。

このような万葉集原撰部（一―五三番歌）の「天の香具山」の響き合いは、この原撰部のみにとどまるものではない。『古事記』上巻の天照大御神の天の石屋戸ごもりの場面に登場する「天の香具山」とも響き合っていると考えられるのである。

念のために書き添えるけれども、万葉集の原撰部五十三首本の成立は持統天皇の時代の可能性が高く、『古事記』成立の元明天皇和銅五年（七二二年）よりもはやいと考えられる。しかし、持統天皇は『古事記』成立の基になった稗田阿礼の誦習していた内容によって、『古事記』に記載されている内容は知っていたであろう。

『古事記』の天照大御神の天の石屋戸ごもりの場面、天照大御神を天の石屋戸の外に出すための祭儀に「天の香具山」（天の香具山に同じ）の動植物が用いられている。次の通り。

（前略）天の児屋の命・布刀玉の命を召びて、天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きて、天の香山の天のははか（木の名）を取りて、占合ひまかなはしめて、天の香山の五百つ真賢木を根こじにこじて、上つ枝に八尺の勾瓏の五百つの御すまるの玉を取り著け、中つ枝に八尺鏡（八尺を訓みてハアタといふ）を取り繫け、下枝に白丹寸手・青丹寸手を取り垂てて（垂を訓

みてシデといふ）、この種々の物は、布刀玉の命、ふと御幣と取り持ちて、天の児屋の命、ふと詔戸言禱き白して、天の手力男の神、戸の掖に隠り立ちて、天の宇受売の命、天の香山の天の日影を手次に繋けて、天の真折を縋として、天の香山の小竹葉を手草に結びて（小竹を訓みてササといふ）、天の石屋戸にうけ伏せて、踏みとどろこし、神懸りして、（後略）

右の記述には、「天の香山」が五回登場し、その山の動物・植物が重要性をもつて用いられている。すなわち、「天の香山の真男鹿」「天の香山の天のははか」（朱桜）、「天の香山の五百つ真賢木」（枝葉の繁ったサカキ）、「天の香山の天の日影」（ひかげのかずら）、「天の香山の小竹葉」である。後述するけれども、常緑樹の「真賢木」や常緑の蔓のまさきのかずらが用いられていることが注目される。

万葉集において「天の香具山」を詠む舒明天皇の二番歌は、春の「天の香具山」であり、藤原の宮の御井の歌の五二番歌には、「大和の青・香具山は 日の経の 大き御門に 春山と 茂みさび立てり」とうたわれている。その「青香具山」はまさに天の香具山の植物の繁茂の緑の豊かさを讃美した表現である。

そして、持統天皇の二八番歌の「天の香具山」は初夏を迎えた樹木の緑輝く聖なる山である。

万葉集の原撰部一―五三番歌における「天の香具山」を詠む三つの歌は、原撰部において響き合うのみならず、古事記の「天の香具山」とも響き合っているのである。このことは、きわめて重要なことを語り告げるのである。

五、万葉集の名とその命名時期

前節の考察に基づけば、万葉集の「万葉」の語は、元は先掲の聖なる天の香具山の常緑樹を中心とした植物（の常緑の葉）を念頭に据えての語であったと考えられる。「万葉」が「万代」すなわち「永遠」の意を持つ要因もその点に求められる。そして、「万葉集」の名は原撰万葉集（一〇五三番歌）においてすでに付けられていたと考えられる。かつて、『日本文学史』（おうふう、一九九七年五月二十五日発行）の第3章第1節において、「『万葉集』の編纂の最もはやい時期においてであると推測される。」と記したが、それが原撰万葉集五十三首本の成立にあたるのである。

万葉集の「万葉」の語については、先掲額田王の一六番歌の題詞の「千葉」（もみちの千葉）や「春山万花の艶」の「万花」を強く意識して用いられたと考えられる。先に考察したように、持統天皇の二八番歌の「春過ぎて夏来るらし」の季節推移表現は、額田王の一六番歌の「冬木成春さり来れば」の季節推移表現を意識して形成されたと考えられる。「万葉」の語の使用にも額田王の一六番歌の題詞の「千葉」や「万花」を強く意識したと考えられる。とすると、晩春初夏の常緑の葉の生命きらめく「万葉」の語に基づく「万葉集」の名は持統天皇がみずから付けた可能性が高い。

六、天武・持統万葉集

品田太吉「巻一・二論」（春陽堂『万葉集講座第六巻』）は、最も記録の詳細な天武・持統紀に一首も歌謡がないことなどから、天武天皇の御代に『万葉集』なる宮廷歌集の編纂が始まったと推定された。また、先師伊藤博も、「万葉集なる歌集の編纂はそもそも天武天皇の発意に基づくのではないかと思われるふしがある。」と述べている（前掲『万葉集の構造と成立 上』第二章第一節）。そしてさらに、天武天皇が帝紀および上古の諸事を記定せしめ（天武紀十年三月）、稗田阿礼に帝王の日継や先代の旧辞を誦習させて（『古事記』序文）、宮廷意識に基づく修史事業の熱意を示している点と、諸国から歌男・歌女・笛吹者を徴収して宮廷集団の歌舞音曲を典礼化し、それを通して宮廷秩序の威容を整えようとした点（天武紀四年二月・十四年九月）とから、「天武天皇には宮廷歌集の編纂を発意して然るべき面が看取されるのであり、それがやがて巻一A部（稿者注、本稿にいう原撰万葉集五十三首本）とな」ったのではないかと述べている。

両氏の発言は注目すべき発言であり、かつ妥当な見解と認められる。以下、本稿なりに、『万葉集』原撰五十三首本の構造という点からその理由を述べよう。

先述したように、原撰『万葉集』五十三首本は、雄略天皇御製歌を象徴歌として一番最初に掲げ、二番歌の舒明天皇御製歌、二八番歌の持統天皇御製歌、五二・三番歌の藤原の宮の御井の歌が、「天の香具山」を詠んで響き合っている。原撰『万葉集』五十三首本の

・ほ・ぼ・中央の二八番歌の位置に持統天皇御製歌が立つことも先述した。

注目すべきは、この持統天皇御製歌（二八番歌）の直前に天武天皇の御製歌（二五番歌）とその異伝歌二六番歌、天武「天皇、吉野の宮に幸す時の御製歌」（二七番歌）が置かれていることである。原撰『万葉集』五十三首本の中央に立つのは、まさにこのような天武天皇御製歌なのである。そして持統天皇御製歌二八番歌と相寄り添うように並び立っているのである。

その天武天皇御製歌を掲げれば、次のとおり（異伝の或本の歌二六番歌は略する）。

天皇の御製歌

み吉野の 耳我の嶺に 時なくぞ 雪は降りける 間なくぞ
雨は降りける その雪の 時なきがごと その雨の 間なきが
ごと 限もおちず 思ひつつぞ来し その山道を（二五番歌）

天皇、吉野の宮に幸す時の御製歌

淑き人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よ良き人よく
見（二七番歌）

紀には「八年巳卯の五月、庚辰の朔の甲申に、吉野の宮に幸す」といふ。

二五番歌は、壬申の乱（六七二年）の直前の天智十年（六七二）十月、皇太子を辞して、近江から吉野に入った時のことを回想した歌で、二七番歌は天武八年（六七九）五月の吉野行幸の折の六皇子

の盟約に拠る歌で、「淑き人」は天武天皇と皇后の鸕野讃良皇女（後の持統天皇）を暗示し、「良き人」は六皇子をいう。

持統天皇は天智十年の吉野入りに、天武八年五月の吉野行幸にも、天武天皇と行動をとともにしている。それゆえ、持統天皇は、天武天皇の二五番歌と二七番歌にきわめてなつかしい思いを抱いたであらう。そのことを語り告げるように、この天武天皇御製歌（二五番歌、二七番歌）の次には寄り添うように持統天皇御製歌二八番歌が置かれているのである。そして、原撰『万葉集』五十三首本の中央に天武天皇と持統天皇の歌が存するのである。

この天武天皇御製歌（二五、二七番歌）は吉野の歌であり、二五番歌には吉野の山である「耳我の嶺」が詠まれている。原撰『万葉集』五十三首本の最後の「藤原の宮の御井の歌」の長歌五三番歌（先掲）にも「名ぐはし 吉野の山は 影面の 大ぎ御門ゆ 雲居にぞ遠くありける」と吉野の山が詠まれ、天武天皇御製歌と響き合っていると言える。

以上の考察から、原撰『万葉集』五十三首本は天武天皇と持統天皇の歌を中心に据えて成立していると言える。このことは、万葉集の編纂は天武天皇の発意に基づくことを語り告げている。そして、上述のように実質の編纂の中心に持統天皇がいる点からすれば、原撰『万葉集』は天武・持統万葉集と捉えることができる。

〈注〉

1、拙稿「千葉の彩」（二節「千葉の彩と万葉の緑」）、『四季の万葉

集』所収、平成二十一年三月三十一日発行、笠間書院

2、拙稿「持統女帝の福祉実践」、はばたき第96号、二〇一四年八月一日発行、山梨ライトハウス山梨青い鳥奉仕団

3、二番歌は春の天の香具山に登り立つての国見歌で、「藤原の宮の御井の歌」では天の香具山は「春山」と讃えられている。持統天皇の二八番歌はその天の香具山の春から夏への推移に視線を注いでいる点に個性の独自性がある。

4、注1拙稿

5、注1拙稿

6、注1拙稿

7、注1拙稿

受領日…二〇一七年十二月六日

受理日…二〇一七年十二月六日